

「労働の二重性」論の検討

——抽象的人間労働概念の意義と問題点——

佐藤 公俊

目次

はじめに

I

- (1) マルクスの具体的有用労働の性格
- (2) マルクスの抽象的人間労働の性格
- (3) マルクスの労働過程の意味

II

- (1) 宇野弘蔵氏の「労働の二重性」論の方法
- (2) 宇野『原論』の「労働過程」
- (3) 宇野『原論』の「生産過程における労働の二重性」

はじめに

周知のように、マルクスは『資本論』第一部第一篇第二章第二節において「商品に表わされたる労働の二重性」を説き、第三篇第五章の第一節で「労働過程」を、第二節で「価値増殖過程」を説いている。マルクスは、「労働の二重性」について、「抽象的人間労働」が「社会的実体」（カール・マルクス『資本論』第一分冊、七十七頁、岡崎次郎訳、国民文庫、大月書店（註））であり、それはまた「価値を形成する実体」（同、七十八頁）でもあるといい、「具体的有用労働」が「物質代謝を……媒介」（同、八十五頁）する「使用価値の形成者」（同上）であると述べた。マルクスの場合、「抽象的人間労働」概念に特殊歴史的な被形態規定性が込められ、「具体的有用労働」はあらゆる社会に共通という意味で原則性を有すると考えられている。この労働概念の、特殊歴史性と原則性とのふり分けは、第五章の方法としても表われており、第一節が原則性に対応し、第二節は特殊歴史性に対応するものである、といえよう。

〔註〕以下、『資本論』からの引用は、たとえば、国民文庫版『資本論』第一分冊、七十七頁からの引用は、（同（一）七十七頁）と略記する。また、宇野弘蔵氏の諸著作からの引用は『宇野弘蔵著作集』（岩波書店）所収のもので、たとえば、『宇野弘蔵著作集』第一巻、二十頁からの引用は、（著（一）二十頁）と略記する。

宇野弘蔵氏は、以上のようなマルクスの労働概念の論理展開の方法を、「形態規定」純化の視点から批判を行った。この批判の成果は、氏の原理体系において、「労働の二重性」が「生産論」冒頭の「労働Ⅱ生産過程」の中に位置づけられ、マルクスの「労働過程」が「労働Ⅱ生産過程」として再編・展開されたことに結実している。

本稿の課題は、宇野氏の「労働Ⅱ生産過程」論における「労働の二重性」、とりわけ「還元」の基準としての「抽

象的人間労働」概念が、マルクスによって付着させられた特殊歴史的な被形態規定性を一掃し、原則性をもつものとして整理されているか、否か、否ならばどのような問題があるか、を検討することである。この検討の準備として、マルクスの「労働の二重性」論と「労働過程」論を吟味しておく。

I

(1) マルクスの具体的有用労働の性格

マルクスは、『資本論』第一部第一章第二節「商品に表わされる労働の二重性」において、「具体的有用労働」について次のように述べている。

労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、人間の、すべての社会形態から独立した存在条件であり、人間と自然とのあいだの物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である。(国(一)八十五頁)

マルクスは、「有用労働」が「使用価値の形成者として」、「人間と自然とのあいだの物質代謝を……媒介するための、永遠の自然必然性」であり、この意味で、「有用労働」が「社会形態」とかわりなく「人間」の「存在条件」である、と考えているといつてよい。明らかに、「物質代謝」、「したがって人間の生活」は「すべての社会」に共通に存在する。それゆえ、「有用労働」は、「あらゆる社会形態に共通な物質的基礎」(著(一)二十頁)の一環であり、「経済原則」(同上)の一環に位置づけられなければならない。

マルクスの「有用労働」は、このように、経済原則として考えてよいのであるが、マルクスは「有用労働」を二つ

の視点から捉えている。一つは、過程として「有用労働」を捉える視点である。マルクスは、「有用労働」を人間の「合目的生産活動」(国(一)八十五頁)と、あるいは、「目的を規定された形態での人間の労働力の支出」(同、九十一頁)と呼んでいる。もう一つは、結果として「有用労働」を捉える視点である。マルクスは、「その有用性がその生産物の使用価値に、またはその生産物が使用価値であるということに、表わされる労働を……有用労働と呼」(同、八十三頁)んでいる。

これら二つの視点自体は、「有用労働」を捉える方法として正当なものである。過程として「有用労働」を捉えることで、「労働力の支出」の「形態」が、「目的」によって規定されて、特定の「形態」を取ることが明らかになる。また、結果として「有用労働」を捉えることで、「その生産物が使用価値である」ことによって、「その有用性」が確認され、「有用労働」がたんなる人間活動ではなく、「合目的生産活動」であることが明らかになるのである。マルクスは、「労働過程」の分析でもこの方法を用いている(註)。

〔註〕 マルクスは、『資本論』第一部第三篇第五章第一節「労働過程」で、まず、労働を「人間と自然とのあいだの一過程」(同、三百十二頁)として考察した。次に、「この全過程をその結果である生産物の立場から見」(同、三百十七頁)ている。

しかし、マルクスが「商品の分析」(同、七十一頁)において、後者の、結果として「有用労働」を捉える視点を用いて、商品から、ただちに「有用労働」を導き出したことには、方法上の難点がある。マルクスの、「商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである」(同、七十六―七頁)ということばからわかるように、マルクスは「商品」論の対象を労働生産物商品としている。この「商品」の使用価値は「労働生産物」の使用価値でもあることになり、「商品」の使用価値から「有用労働」が導き出されるこ

とになったのである。

こうしてマルクスのように、「商品」論で「有用労働」を、したがって経済原則を解明しようとする、方法上の混乱が生ずることになる。マルクスは、「価値形態」論において「形態規定」純化の視点を設定している。この視点により、「商品という形態」の解明が原理論体系における商品論の基本課題であるとするならば、「形態」を支える経済原則の解明は商品論の課題たりえない。したがって、商品論では、商品の使用価値から「有用労働」を導き出す必要はなく、過程ないし結果としての「有用労働」を捉える視点をを用いる必要も、また、ないであろう(註)。

〔註〕商品論の方法についてのマルクス批判は、宇野弘蔵氏が、「商品」論における「価値実体」論の批判として行われた。『経済学方法論』(著(四)百五十七―百六十二頁)参照。

(2) マルクスの抽象的人間労働の性格

マルクスは抽象的人間労働の性格を三面にわたって論じた。第一の側面は価値の実体としてである。マルクスは次のように述べている。「価値としては、上着とリンネルとは、同じ実体をもった物であり、同種の労働の客体的表現である」(国(一)八十六頁)。この「同種の労働」とは裁縫や織布という労働の「同じ質……人間労働という質」(同、八十九頁)のことであり、「商品の価値は、ただの人間労働を、人間労働一般の支出を、表わしている」(同、八十七頁)のである。

マルクスは商品間の「質的に違った使用価値」(同、八十三頁)から「質的に違った」労働を、すなわち有用労働を導き出したが、ここでは、商品相互の「価値として」の同質性から「同じ実体」、「同種の労働の客体的表現」を導

き出している。この導出方法の問題点は、前述のとおりだが、「同じ実体」と「同種の労働」とは同じものではなく、やや距離があると思われる。「同種の労働」とは労働相互の「人間労働」という「同じ質」であると考えてよい。これは過程として捉えられた労働相互の同質性である。「同じ実体」とは、「人間労働力の支出の、ただの凝固物」（同、七十七頁）、「共通な社会的実体の結晶」（同上）のことであろう。いいかえれば、「対象化」（同、七十八頁）された「抽象的人間労働」である。これは結果として捉えられた労働相互の同質性である。この結果としての労働相互の同質性は「価値に含まれ」（同、八十九頁）ており、「商品の価値」はこの同質性を「表わしている」のである。このように、マルクスは、結果として捉えられた労働相互の同質性を価値の「同じ実体」と考えており、過程として捉えられた同質性を「共通な社会的実体」と考えているのである。

要するに、マルクスは、結果として捉えられた労働相互の同質性——「対象化」された「抽象的人間労働」——と、過程として捉えられた労働相互の同質性——「価値を形成する実体」——との二面をもって、労働相互の同質性たる「抽象的人間労働」を価値の実体と考えているのである。マルクスは、前述の「有用労働」をあらゆる社会に存在するとしたのに対し、この「抽象的人間労働」を「商品生産」に特有のものと考えていると思われる。この意味での「抽象的人間労働」は、奴隷労働、農奴の労働などと対比される、特殊歴史的な労働の側面である。労働が「商品生産」における労働として、商品形態と関係することから生ずるとされるこの側面は、特殊歴史的な形態規定を受けた労働の側面であるといえよう。

第二の側面は価値の大きさとの関連である。マルクスは、この点について次のようにいっている。「ブルジョア社会」における「人間労働」は「平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている

単純な労働力の支出」、「単純な平均労働」（同上）である。「ある商品がどんなに複雑な労働の生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり……いろいろな労働種類がその度量単位としての単純労働に換算される」（同、八十八頁）のである。かくして、「商品に含まれている労働は……価値量との関連では、もはやそれ以外には質をもたない人間労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められるのである」（同、八十九頁）。

「商品生産」一般に対して、資本主義的商品生産は特殊な「商品生産」である。したがって、「ブルジョア社会」における「人間労働」、すなわち「単純な平均労働」は特殊な「人間労働」ということになる。マルクスは、この「単純な平均労働」を「度量単位」とし、「価値」による「複雑な労働の生産物」と「単純労働の生産物」との「等置」をとおして、労働が「単純労働」として「換算」されるといい、「ブルジョア社会」では「単純な平均労働」として「抽象的人間労働」が労働量計算の基準になると考えている。たしかに、資本主義社会にあっては、労働自身が「単純」化され「平均」化する傾向をもつ（註）。しかし、この「単純な平均労働」が成立するのは労働力の商品化を歴史的前提とした資本主義社会においてであって、「商品生産」一般においてではない。したがって、「抽象的人間労働」一般には「単純な平均労働」ではなく、特殊に、資本主義社会において「単純な平均労働」たりうることになる。マルクスのように、一般に、「抽象的人間労働」を「商品に含まれている労働」の「還元」基準とし、「抽象的人間労働」を「度量単位」として用いるのは、「抽象的人間労働」の「性質」として妥当かどうか、検討を要する問題である。

〔註〕 宇野氏がこの点を明確に指摘された。『経済学方法論』（著九百六十四―五頁）参照。

第三の側面は価値形成についてである。マルクスは、「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働

力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という屬性において、それは商品価値を形成するのである」(同、九十一頁)と述べている。ここでは、マルクスは「抽象的人間労働」を過程として捉えて、「生理学的意味での人間の労働力の支出」と説明している。労働の「生理学的意味での労働力の支出」という側面が、「商品生産」に限られるものではないことは明らかである。こう見る限り、この側面は労働の特殊歴史的な側面であるとはいえない。それゆえ、「抽象的人間労働」は、第一の側面に見られるように特殊歴史的な形態規定を受けたものか、あるいはこの第三の側面のような原則的なものを明らかにすることが、検討すべき第二の問題点となる(註)。

〔註〕 マルクスの「労働の二重性」論の位置付けの問題と「抽象的人間労働」の性格規定の問題とは、宇野氏の整理によって、大枠としては解決されているといつてよい。氏の原理体系において、「労働の二重性」が、経済原則を説明する場である「労働Ⅱ生産過程」の中に位置づけられることで、位置の問題は基本的に解決されている。しかしながら、氏は「抽象的人間労働への還元」(著(九百六十八頁))を原則として説明するという方法を示しており、これは先に見たマルクスの「還元」と同様な問題を有しているのではないかと考えられる。そこで、「抽象的人間労働」の性格の検討は、さらに続けられる必要がある。

(3) マルクスの労働過程の意味

マルクスの「抽象的人間労働」の性格についての問題点、すなわち、「抽象的人間労働」は原則に属する労働の一側面か、あるいは形態規定を受けた特殊歴史的な労働の一側面であるのか、この点がマルクスの「労働過程」の位置づけと分析との中でどのように処理されているかを検討しておこう。

マルクスは「労働過程」と「価値形成過程」との関係を次のように述べている。

価値形成過程を労働過程と比べてみれば、後者は、使用価値を生産する有用労働によって成り立っている。運動はここでは質的に、その特殊な仕方において、目的と内容とによって、考察される。同じ労働過程が価値形成過程では、ただその量的な面だけによって現われる。もはや問題になるのは、労働がその作業に必要とする時間、すなわち労働力が有用的に支出される継続時間だけである。(國)三百四十一頁)

マルクスは、「労働過程」が「有用労働によって成り立って」おり、「労働過程」では「運動」が「質的」にのみ考察されていて「量的な面」は「問題」になっていないという。だが、はたして、「労働過程」は「有用労働」だけから「成り立って」いるといえるのであろうか。また、「量的な面」はいかなる意味で「問題」にならないのであろうか。

マルクスは「労働過程」を原則として捉えている。すなわち、合目的な生産活動による「労働過程」は、「人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。」(同、三百二十二頁)と性格付けられているのである(註)。

〔註〕 高橋洋児氏は、このような「労働過程」一般の抽象をこう批判されている。

「労働過程といえども、そのつどつねになんらかの特殊歴史的な形態に包まれた形でしか実在しえないのであって、この(「資本の生産過程」論——引用者)ではそれは資本主義的生産過程をなすかぎりで労働過程でありうるのである。没規定的な『人間と自然との物質代謝過程』なるものを想定することはできない。」(桜井・山口・佐美・伊藤編『経済学』一、有斐閣、百六十—二頁)

「労働過程」は、現実には、「なんらかの特殊歴史的な形態に包まれた形でしか実在しえない」のは確かである。また、理

論上、「資本主義的生産過程」は、「特殊歴史的な形態」たる資本に包摂された「労働過程」といってよい。しかし、このように形態と実体とがからみあっているので、「特殊歴史的な形態」から「没規定的な『人間と自然との物質代謝過程』」を抽象できないとすると、この「物質代謝過程」から「規定」されない「特殊歴史的な形態」を抽象することもできなくなるのではないだろうか。あるいは、高橋氏は、「人間と自然との物質代謝過程」という概念自体が無内容で何ものをも明らかにするものではないと、主張されているだけなのであろうか。

マルクスは、労働をこのような人間と自然との物質代謝の一環に位置づけて、こういつている。「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材にたいして、彼自身一つの自然力として相對する」（同、三百十二頁）。マルクスは、「物質代謝」における人間の自然に対する主体的行為を、まず「生理学的意味」ととらえ、人間の「肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手」（同上）の運動であるという。この主体的行為は、人間の「肉体的……諸能力」（同、二百九十四頁）の発現であるばかりではない。マルクスは、この行為が労働であるためには、さらに、人間活動を動物の活動と区別する特色、「精神的諸能力」（同上）の発現が必要であるといっている。そして、「労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり觀念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである」（同、三百十二頁）り、このためには、「労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現われる合目的な意志が労働の継続期間全体にわたって必要である。」（同、三百十三頁）。かくして、労働過程においては、「人間の肉体すなわち生きている人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときとそのつど運動させるところの、肉体的および精神的諸能力の総体」（同、二百九十四頁）つまり、「労働力または労働能力」（同上）が発現しているのである（註）。

〔註〕 永谷清氏は、「歴史的成果としての生産力の主体的要因をなし、自然に働きかける「自然力としての労働能力」と「日々労働を通して消費され、個人的消費を経て再生されている労働力とはことなる。」と「労働能力」と「労働力」を区別されている（永谷清『科学としての資本論』、弘文堂、百三十三頁）。

マルクスが、「商品」論中の「労働の二重性」論で、「使用価値を生産する」のは「具体的有用労働という属性」である、と規定しているのに対応して、「労働過程」論では、「使用価値」を実現する労働の「合目的」性格が強調され、労働とは、「特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出」という「具体的有用労働」である、と考えられている。

このようなマルクスの方法に従うならば、「人間生活のあらゆる社会的形態に等しく共通な」「労働」は、「使用価値を生産する」「具体的有用労働」に限られることになる。この「労働」は、「二重性」を有さず、「二重性」の一面でしかない「労働」なのである。これに対して、「商品生産」にかかわる労働、すなわち「価値を形成」する労働が、「抽象的人間労働」として「二重性」のもう一つの面をなす。マルクスにあっては、両者が「商品生産」の成果としての商品に統一されている、と説かれるのである。このことは、マルクスが「抽象的人間労働」を「商品生産」に特有な労働、特殊歴史的な形態規定を受けた労働と考えていたことに由来する、といつてよい。

しかしながら、すでに前節で述べたことであるが、労働は、その生産物が商品化されない場合であっても、すなわち商品の「価値を形成」しない労働であっても、「人間生活のあらゆる社会的形態に等しく共通」に、人間の「肉体にそなわる自然力」の発現なのであり、「生理学的意味での人間の労働力の支出」なのである。そして、このかぎりでは、個々の様々な人間の諸労働は、すべて「同等な人間労働」なのであり、一様に「抽象的人間労働という属性」を

有するのである。あるいは、次のようにいかえてもよい。労働は一般的にそれ自体が、「自然力」の発現として、「生理学的意味での人間の労働力の支出」として、「抽象的人間労働という屬性」を有するのであり、その屬性は人間生活の「どの形態にもかかわりなく」人間の労働に存する屬性なのである、と。

先の論点を、このように再確認するならば、マルクスの「労働」概念には根本的な難点が見い出されよう。すなわち、人間と自然との物質代謝の一環としての労働は、「目的を規定された形態での人間の労働力の支出」という具体的有用労働の屬性を有するが、それと同時に、「自然力」として「生理学的な意味での人間の労働力の支出」という抽象的人間労働の屬性をも有しているのである。マルクスもいうように、「人間は自分と自然との物質代謝を自身行為によって媒介し、規制し、制御するのである」から、人間の労働対象である自然に対して主体的に働きかける行為こそが、労働なのであり、その労働過程で発現される「労働力または労働能力」が、この過程での主体的要因なのである。マルクスにあっては、すでに、この主体的要因である労働力には、先にも見たように、「自然力」という性格と、「合目的」性格と、二つの性格の存することが説かれているのである。つまり、「労働過程」論で明らかになされるべき諸課題の中で「労働の二重性」論にかかわるものについて、その課題を精確に設定するならば、以下のようになろう。「労働過程」の分析においては、人間と自然との物質代謝の一環に労働が一般的に位置づけられる。この過程の主体的要因たる労働力の一般的性格である二つの性格、「自然力」という性格と「合目的」性格とに則して、初めて「労働の二重性」が、「抽象的人間労働」と「具体的有用労働」とが、説かれるべきであり、したがってまた、精確に説くことが可能なのではないのだろうか。

こうしてマルクスの「労働過程」論から導き出さうる、「労働の二重性」の考察では、「労働」は一般的にあるいは

原則として「二重性」を有する、という、いわば「労働の二重性」の「質的」な規定を、十分に説きうる。そして、前節で指摘した「抽象的人間労働」概念にかかわる二つの問題点の内の第二の問題点についての検討は一応なされたとしてよい。しかしながら、マルクスによっては、第一の問題点、すなわち「抽象的人間労働」が種々の労働の「還元」基準たりうるか否か、の考察は十分になされておらず、したがって「労働の二重性」論での「量的」な規定をなさないことの意味が検討されていないと思われる。

マルクスにあつては、「価値形成過程」が「商品の生産過程」（国(三)三百二十六頁)の中に位置づけられ、労働が「単純な労働であり社会的平均労働であると仮定」（同、三百三十一頁）されることで問題が処理されてしまっている(註)。マルクスの「商品」論での無理な規定を度外視するならば、「抽象的人間労働」が「還元」の基準性を有するという論点は、マルクスの立論の中で、この基準性が特殊歴史的なものであるのか、あるいは原則性に属するものであるかを吟味することはできないといつてよく、その根拠が不明瞭である、といわざるをえない。

〔註〕 宇野氏は、マルクスの「商品の生産過程」を「歴史的に曖昧な規定」（著(九)百六十九頁）であると批判されている。

II

(1) 宇野弘蔵氏の「労働の二重性」論の方法

宇野弘蔵氏は、「労働の二重性」の性格と「抽象的人間労働」の基準性とを、どのように捉えているのであろうか。宇野氏は、「社会的実体として一社会を基礎づける労働の二重性は、何も商品経済に限られるわけではない」、この「二面」は「あらゆる社会的労働に共通」（著(九)百六十七—八頁）である、と述べて、「労働の二重性」が「あ

らゆる社会」に「共通」であることを、明らかにしている。他方、氏は、「抽象的人間労働への還元は、その方式を種々なる社会における労働の社会的規定によって種々異にするのである。生産方法の発展は、この還元方式をも単純化し、一般化するものといってよい」（同、百六十八頁）とも述べている。つまり、宇野氏は、「抽象的人間労働への還元」が「あらゆる社会」に共通するものではあること、したがって、「抽象的人間労働」が、「還元」の基準であるという性格を「あらゆる社会」において有していると考えているわけである。

宇野氏は、マルクスの「価値」による複雑労働の単純労働への「換算」を、「交換関係を通して、いわば外部的に与えられる」だけの「商品経済的平均化」（同、百六十六頁）にすぎない、と批判しているので、氏自身の「還元」は、このような「外部的」な「商品経済的平均化」を意味するものではないはずである。宇野氏は、「資本主義以前の諸社会……では、商品経済はなおその補足的部分をなすにすぎないのであって、商品経済的な社会的平均化はむしろ十分なる展開をなしえなかつたのである。資本主義社会は、これらの旧社会が他の形態をもって行い、商品形態をもって部分的にしか行わなかつた経済過程を、全面的に商品形態をもって行う」（同、百六十五頁）、と述べている。つまり、宇野氏は、「資本主義社会」に至って初めて「全面的に商品形態をもって行」われる「社会的平均化」の方法を、「抽象的人間労働への還元」「方式」としては、もっとも「単純化」された、もっとも「一般化」された、いわばもっとも完成された「還元方式」である、と考えているようである。

しかしながら、宇野氏にしたがうとしても、「資本主義以前の諸社会」にあつては、一方で「部分的」「補足的」にはあれ「いわば外部的に与えられる」「商品経済的平均化」がやはり行われている。それと同時に、他方では、いわば不完全な「方式」でありながらも、全体としてではないが、主要な「還元方式」が、各々のその「社会におけ

る労働の社会的規定によって」、いずれも非「商品経済的平均化」の方法として、各々の社会に存在していることになる、と考えざるをえない。

宇野氏の「あらゆる社会」に共通な「抽象的人間労働への還元」が、「特殊の形態と『切りはなして』は考察しえない」(同、百六十五頁)、ということとは、明白である。したがって、「還元」が原則としての「抽象的人間労働へ」なされるのにさいして、「還元」が特殊歴史的な「形態と『切りはなして』は」ありえない、ということとは、「還元」現象が超歴史的に確認しうるとしても、なお「還元」自身が「抽象的人間労働」の直接の属性であるといえるのか、どうかはこれだけでは判断しえない。このかぎりでは、「抽象的人間労働」そのものが「あらゆる社会に共通」する性格として「基準」性を有する、ということにはなお検討の余地が残るのである(註)。

〔註〕 山口重克氏は、宇野氏の「あらゆる社会」に共通な「労働生産過程」の抽象に「人間が自然に働きかけるさいに結ぶ人間と人間の関係が階級的に処理されているいわば痕跡をとどめた労働生産過程の抽象」(山口重克「労働生産過程と価値の実体規定」、『宇野弘藏をどうとらえるか』、芳賀書店、百四十九頁)の側面があると指摘されている。

(2) 宇野『原論』の「労働過程」

宇野氏の旧『原論』における、第二篇第一章「労働Ⅱ生産過程」は、「A 労働過程」、「B 生産過程」における労働の二重性、「C 生産的労働の社会的規定」の三項からなっている。

宇野氏は、「A 労働過程」において、「人間は、労働過程において、自己の労働力を物に変えつつ、物を使用価値として獲得する。そして、この使用価値の個人的消費が、結局、労働力を新たに形成するものとなるわけである。

労働過程は……人間と自然との間に行われる物質代謝の過程の基礎をなす」（著一八十七頁）と述べている。そして、氏は、労働力を次のように性格づけている。

種々なる特殊の使用価値を消費して得られる人間の労働力は、……一般的にあらゆる物に転化し得る力として、したがってまた人間の目的にしたがっていかようにも使用し得る力である。それは自然と人間とを結ぶ環をなすわけである。（同上）

宇野氏の「労働過程」は一面ではマルクスの「労働過程」前半部分を継承しているといつてよい。それだけではなく、氏の見解においては、マルクスでは不明瞭であった労働力の性格と「物質代謝」の中におけるその位置づけが、労働力の再生産として、自然と人間とを結ぶ環として明らかになっている。また、マルクスの「労働過程」論の検討で明らかにしたように、宇野氏の「労働過程」論でも、合「目的」性と「自然力」（同上）として、事實上、労働の「二重性」が説かれているといってよい。さらに、氏は、「生産物の見地」（同、八十八頁）からふり返って「労働の「二重性」を考察している（註）。それが「B 生産過程における労働の二重性」の課題の一つとされているわけである。

〔註〕 宇野氏は、桜井毅氏の間に対し、「労働過程」と「生産過程」とに対する視点の相違について次のように語っている。

「労働過程というほうでは、マルクスもいつているように、人間が自然に対する関係をいい、生産過程というのは、生産物の点から労働過程をいわば横からみることになる。」（宇野弘藏編『資本論研究』Ⅱ、筑摩書房、二百二十六頁、以下『研究』Ⅱと略記する。）

宇野氏は、事實上、「労働の二重性」を「労働過程」で説きながらも、「生産過程における労働の二重性」として、「生産物の見地」から「労働の二重性」を積極的に解明されている。これは、氏が、まず、「いろいろなものを生産しうるといふ点は生産過程」（『研究』Ⅱ二百二十六頁）で説明されるゆえに、「いろいろなものを生産しうる」

基礎である「労働の二重性」も、「生産過程」で積極的に解明されると考えていたことによる、と思われる。この点に関しては、先に見たように、氏は「労働過程」で、労働力を「一般的にあらゆるものに転化し得る力である」と説明している。それゆえ、「いろいろなものを生産しうる点」は、「労働過程」論で、二側面を持つ労働力の支出である労働にもとづいて、積極的に説明されるべきであると思われる。宇野氏は、「労働の二重性」が「労働過程を前提として生産過程でいえる」（同、二百二十七頁）と語っているが、「労働過程」で説かれた「労働の二重性」を「前提」として「生産過程」を「いえる」のではないだろうか（註）。

〔註〕 大内秀明氏は、「労働過程で合目的労働としての具体的有用労働、客観化する生産過程としては、それが社会的性格をもつことからいっても、抽象的人間労働が解明できるようにおもわれる」（大内秀明『価値論の形成』、東京大学出版会、三百二十頁）と述べて、「労働過程」と「生産過程」とへ、それぞれ、「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」との解明を振り分ける方法を示唆されている。

この大内説に対し、降旗節雄氏は、「生産過程」で「労働の二重性」を解明する立場をとって以下のような批判を加えている。

『労働過程』においてすでに「労働の二重性」が解明できるものであれば、もともとこれに対して『生産物の立場から』『生産過程』なる異なった規定性をあたえる必要もなかったのである。（降旗節雄『資本論体系の研究』、青木書店、百七十四頁）。

小林彌六氏は、通説にみられる「流通形態論」から「生産論」への移行における「産業資本」と「労働・生産過程」との「断絶」（小林彌六『経済原論』、御茶の水書房、百四十二頁）に対する方法上の批判をふまえ、「資本の生産過程とおし」（同上）た「労働過程」で「労働の二重性」を解明されている。永谷清氏も「労働過程」で「労働の二重性」を解明されている（大内秀明・鎌倉孝夫編『経済原論』、有斐閣、六十二頁参照）。

宇野氏が労働の二重性を生産過程で積極的に説く理由はもう一つある。氏が、「何時間が働いてこれだけのものを

つくるといことは、生産物の観点からいった労働過程」(同、二百二十七頁)であると語っていることから考えると次のようになろう。この「何時間か」がわかるのは、「労働過程」の結果としての「生産物の観点」からである。生産手段の存在を考慮するとこの「何時間か」は、直接にその生産物の生産に要する労働時間に限られない。生産手段の生産に要した労働時間も含まなければならぬ。相互に異なる労働を加算するには、一定の基準を要する。それゆえ、この基準として「抽象的人間労働」が、「生産物の観点」で見る「生産過程」で積極的に解明されねばならないということになる。

(3) 宇野『原論』の「生産過程における労働の二重性」

宇野氏は「B 生産過程における労働の二重性」において、「労働の二重性」特に「抽象的人間労働」の基準性を考察の中心としている。氏は、「生産物の見地」からの「客観的」な「生産過程」(著(一)八十八頁)においては、「生産物の「生産に要した労働の計算」(同、八十九頁)が成立していると述べる。「抽象的人間労働」はこの「計算」を成立させる基準であるという意義を有する。氏は、この「抽象的人間労働」の意義を二段に分けて考察している。第一に、「抽象的人間労働」そのものとして「計算」が成立するという点である。

この紡績過程で行われる労働は、かくして二重の性質を持っている。もちろん、労働する者が二度労働するのではないが、同じ労働が二面をもって作用する。……後者は、前者の具体的有用労働に対して抽象的人間労働ということが出来る。というのはこの面では紡績労働も単に人間労働力の支出として、その時間的継続によって量的に異なるにすぎず、綿花の栽培、機械の製作にあたって支出される労働力による労働と同じ質のもの

して計量せられるからである。(同上)

しかしながら、「労働の計算」は、各種の労働が「人間労働力の支出として」「同じ質」であるということだけでは、成立しない。異種労働間における単純労働と複雑労働の相違をどう評価するか、また同種労働間における熟練度や能力差をどう処理するかが問題となるからである。

宇野氏は、「抽象的人間労働」の基準性として、第二に、「抽象的人間労働による還元」(同、九十一頁)をあげ、次のように説明する。

紡績労働でも、また綿花の栽培、機械の製作でも、それ自身のうちにも労働力は種々なる形で支出されるのであって、六時間の紡績労働といえ、すでにそのうちでかかる種々なる形の労働力の支出が同質の人間労働の支出に還元せられている。またそれだからこそ綿糸の生産に必要な労働として、綿花、機械等の生産に必要な労働と共に同質のものとして計量され得るのである。……それぞれの使用価値の生産に必要な労働という場合には、いずれも一定の平均した労働力の支出をもって計量する外はない。例えば機械の製作には熟練を要し、綿花の栽培には簡単な労働しか要しないということもあるであろう。また人によっては例えばその人の遅鈍のために、一〇斤の綿糸の生産に普通には六時間の労働でよいものを一〇時間を要したということもあるかもしれない。しかしこれらはいずれも一定の水準の普通の労働に換算されなければ、綿糸一〇斤の生産に三〇時間を要したとはいえない。(同、九十一頁)

宇野氏の見解は、第二の「抽象的人間労働による還元」によって、第一の「抽象的人間労働」としての「労働の計算」が可能となる論理構造をとっているのである。氏は、このような「還元」は、「あらゆる社会形態に一樣の方式

で行われるものではない。それは生産的労働の社会的規定によって種々異り得る。」(同、九十二頁)と述べて、「一様の方式」ではないにしても、「還元」自体の存在があらゆる社会形態に共通であることを示している。

宇野氏は、「計算」に必要な「同質」性をうるための「還元」を三つの側面で説いている。第一に、一定量の特定労働という場合、その中に「種々なる形の労働力の支出が同質の人間労働力の支出に還元」されている。それゆえ、この労働は生産手段の「生産に必要な労働と共に同質のものとして計算され得る」、という側面である。第二に、「それぞれの使用価値の生産に必要な労働という場合には、いずれも一定の平均した労働力の支出をもって計算する」、という側面である。最後に、能力差による労働時間のばらつきは「いずれも一定の水準の普通の労働に換算されなければ、綿糸一〇斤の生産に三〇時間を要したとはいえない」という側面である。

第一の側面では、一定量の特定労働という労働のとらえ方は、特定の労働に含まれる「種々なる形の労働力の支出」が、いわば一連の作業手順が、「同質の人間労働力の支出」、特定労働として抽象的に一樣に考えられていることを示すものと説明されている。このように一樣に考えられることの根拠は、一連の作業手順がそれぞれ「人間労働力の支出」としては「同じ質」であることによるのももちろんである(註)。

〔註〕 宇野氏は、新『原論』では、生産手段の生産に要した労働とそれを用いる生産に直接要する労働とが、「抽象的人間労働」として、「一樣なるもの」として、新生産物の生産に要する労働時間(著(二)四十頁)とされると述べている。この「一樣」化は、「抽象的人間労働」そのものとして「計算」が成立するということとほぼ同義であると思われる。

宇野氏は、この第一の側面の「還元」も、「一様の方式」ではないにしても、「あらゆる社会形態」に共通するといっている。これは、「あらゆる社会形態」において、労働が抽象的にとらえられること、この抽象の「方式」は、労

働の在り方、すなわち「生産的労働の社会的規定によって種々異り得る」ことを意味していると思われる(註)。商品経済的「整約」もその一つである。

〔註〕 マルクスは、このような労働の抽象について次のようにいっている。

「どんな状態のもとでも、生活手段の生産に費やされる労働時間は、人間の関心事でなければならなかった。といっても、発展段階の相違によって一様ではないが。」(国(一)百三十四頁)

この文に対し、マルクスは、第二版で、以下の注をつけている。

「古代ゲルマン人のあいだでは一モルゲンの土地の大きさは一日の労働によって計られ、したがって、一モルゲンは Tagwerk (Tagwane) [「日の仕事」……などと呼ばれた。](同上)」

あらゆる社会に共通な「還元」の第二、第三の側面の、基準である「一定の平均した労働」、「一定の水準の普通の労働」とは何だろうか。宇野氏は、「単純な労働」があらゆる社会に共通に存在することを次のように述べている。

旧来の社会でも、単純な労働力による生産部面が基礎にあるわけでしょう。そうでなければどんな社会も成り立つわけがない。古代社会でも中世社会でも、一般的な基礎はむしろ単純な労働力による労働からなっていて、そのうえに熟練労働とか、そのほかのいろんな労働がある。(『研究』Ⅱ二百二十一頁)

また、宇野氏は、非「商品経済的な社会的平均化」(著(9)百六十五頁)が、「資本主義以前の諸社会」に存在したことを以下のようにいっている。

かかる社会においても、社会的労働が行われなかったわけではないし、生産条件が「正常」なものに帰一する傾向が全然なかったというわけでもない。また、その労働が「社会的平均度」の熟練と強度とをもって行われ

なかったというのでもない。(同上)

五八

したがって、宇野氏によれば「商品経済的な社会的平均化」とは別に、あらゆる社会に共通に客観的な社会的平均化が存在することになる。

たしかに、宇野氏が指摘するように、「単純労働」も「社会的平均化」もあらゆる社会に共通に存在するといつてよい。しかし、「単純労働」も「社会的平均化」も「旧来の社会」では全面的なものではないだろう。「古代社会でも中世社会でも、一般的な基礎」は「単純労働」であったといつても、「熟練労働とか、そのほかのいろいろな労働」が「単純労働」に解消されるわけではない。また非「商品経済的な社会的平均化」は、「旧来の社会」の一部にはあるにしても、社会全体に全面化するものではない。

「旧来の社会」における「単純労働」は、具体的には、農業労働としてあろう。農業労働自体は、個々の作業手順は単純なものであろうが、作業全体として見れば作業の配分編成の面があるので、かならずしも、「単純労働」とはいえない面をもっていると思われる。また、かりに、農業労働が「単純労働」だとしても、「熟練労働」がこの「単純労働」に「還元」されるのは商品形態を通してであらうから、この「還元」は、「価値としては同質のものである」という、商品交換の一般的規定を述べるものにすぎない(著(二)四十五頁)ものであろう。したがって、この「単純労働」は「還元」の客観的基準たりえないのである。

「旧来の社会」の「社会的平均化」も、一部の傾向にとどまり、「資本の下に労働力が商品として購入されて行われる生産過程において始めて具体的に規定」(同、四十四頁)されるようなものではない。資本主義とは異なり、資本によっていわば「締められた」(註)「物質的基礎」をもたない「社会的平均化」は、かならずしも客観的な基準を

もつとはいえない「平均化」である。そのような「平均」的労働は、それゆえ、「還元」の客観的な基準たりえないのである。

〔註〕宇野氏は、「縮められた関係」の原理体系内における位置を決定する論理展開上の先後関係について、次のような指摘をされている。

「先に第二篇で明らかにした資本の生産過程における価値の形成Ⅱ増殖の過程にも、その背後にこの第三篇に説く資本の競争を有しているのであって、競争によって——それも単に商品の売買の競争というだけでなく、資本による商品の生産、販売の競争によって——いわば縮められた関係を抽象して価値の形成Ⅱ増殖の過程を明らかにしたものに外ならない。」(著)二百八十七頁)

このように、宇野氏は、あらゆる社会に共通な「抽象的人間労働による還元」のさいの基準として、「抽象的人間労働」概念を「単純な平均労働」として用いている。むろん、資本主義社会では、資本による還元によって、客観的な基準としての単純な平均労働が成立している。そうだからといって、宇野氏のように「旧来の社会」における客観的な基準ではない「単純な平均労働」を、資本主義における単純な平均労働と同一次元の基準として等置できないであろう。それは、宇野氏の「抽象的人間労働」概念が、マルクスの「抽象的人間労働」と「単純な平均労働」との「基準」としての同一視を、受けついだ面をもつことを示している。資本主義における単純な平均労働自体、「労働の二重性」を有する特殊歴史的な労働なのである。したがって、あらゆる社会に共通なものとして、「抽象的人間労働」に「還元」の客観的な基準性を認めることには、やはり難点が残されていると思われるのである。

〔補註〕宇野氏は「C 生産的労働の社会的規定」において、「物質代謝の過程において、人間は必ず自己の生活に必要とせられる使用価値以上の生産物を獲得して来ている」(著)九十一頁)の「剰余」(同上)は「社会的分業と私有財産との基礎をなす」(同、九十二頁)と述べて、「剰余生産物」とその根拠となる「剰余労働」(同上)とが社会全体として確認さ

れる点を説いている。このことは、「労働過程」論では「労働者を他の労働者との関係のなかで示す必要はなかった」(四(一)三百二十二頁)と、即ち原則性を個別「労働過程」に限定しようとするマルクスの「労働過程」論を、はるかに凌ぐ視点を宇野氏が提起していることを示すものである。しかし、宇野氏にあっては、「生産過程における労働の二重性」とりわけ「抽象的人間労働」の側面と、この社会全体を見る視点とが、いかなる論理上の関連を有するものか、方法上必ずしも明確ではない。

これにたいして様々な論者が、生産過程論の方法を論じている。安田展敏氏は、「生産過程は資本が労働過程をつかむための現実的な媒介環である」(『社会的実体としての『労働生産過程論』(下)、『経済志林』、第四十二巻第一号五十九頁)と位置づけを行われている。小林芳樹氏は、「労働生産過程の認識は……全社会をおおう個別無政府的生产を論理的想定としながら、その均衡編成状態をとって抽象する他ないのである」(『労働生産過程』論の方法、『経済学年誌』、第十四号七十四頁)と述べられている。吉沢英成氏は、「『生産過程』とは資本につつまれた生産過程を対象とすべきであろう」(『生産過程』と価値法則、『経済学研究』、東京大学、十一号十二頁)と書かれている。村上和光氏は、『生産過程』を『労働過程』から独自に設定する意味を「個別の『労働過程間』の社会的関連の形成との関係で、明確」にすることによって「労働の二重性をとらえ」うると論じられている(『労働過程』と資本制的生产、『研究年報経済学』、第三十五巻第三号五十七頁)。菅原陽心氏は、「労働生産過程論は、資本主義的生产の展開から、その形態規定性を捨象することによって把握しうる」といわれている(今東・菅原・松尾・丸山・渡辺『価値と市場機構』、時潮社、四十七頁)。